11 月 27 日のメッセージ

聖書：エレミヤ書　33：　14 – 16

「正義の若枝」

暦は待降節(アドヴェント)を迎えました。シンボルカラーも緑から紫になりました。紫は「待つ」色だと言われます。

では、私たちは「何を」待っているのでしょう。

第一義には、やはり直前に迫ったクリスマスでしょう。クリスマスは神の約束の実現の日です。捕囚され、意気消沈していたイスラエルの民に、神がエレミヤを通して「見よ、わたしが、イスラエルの家とユダの家に恵みの約束を果たす日が来る」(エレミヤ書 33:14)と言われました。その約束の日こそクリスマスです。

「その日、その時、わたしはダビデのために正義の若枝を生え出でさせる。彼は公平と正義をもってこの国を治める。」(エレミヤ書 33:15)

この「正義の若枝」こそ、私たちの救い主、イエス・キリストに他なりません。

彼が実現するのは正義と公平です。

「正義」とは神の前の正しさを言います。神から離れないこと、神に従い続けることと言い換えて良いでしょう。一方、「公平」とは単に等しいことに留まりません。自分の足で歩ける者には軽めに、小さくされている者にはより手厚く力を貸すこと。それが神の公平です。

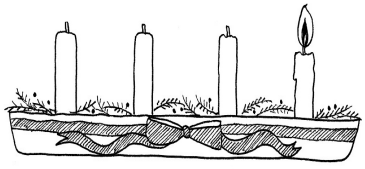
神の正義を、神の愛を待ち続けていたイスラエルの民の声に、神は答えてくださったのです。私たちはこの事実を、今から 2000 年前、神が約束を実現された事実を知っています。

だから、私たちは今も、もう一つの約束を待っているのです。それは、「十字架につけられ、死にて葬られ、陰府(よみ)にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇」られたイエスが、再び地上に来られることです(「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。」ルカによる福音書 21:27)。

イエスが天に昇られた後、人々は神が約束された正義と公平がすぐに実現することを期待していました。ところが、待てど暮らせどその日は来ません。それでも彼らは、一日千秋の思いで待ち続けました(「兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい。農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。」ヤコブの手紙 5:7)。主が再び来られる時を待ち続けました。その道は辛く、厳しい道でしたが、彼らにとってそれは恵みと慈しみに満ちた道でもありました(「その契約と定めを守る人にとって／主の道はすべて、慈しみとまこと。」詩編 25:10)。

世代が変わっても、人々は神の約束を待ち続けます。それは、「主を畏れる人に／主は契約の奥義を悟らせてくださる」(詩編 25:14)からです。「はっきり言っておく。すべてのことが起こるまでは、この時代は決して滅びない。天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」(ルカによる福音書 21:32-33)からです。

だから、今日も私たちは待ち続けているのです。確かに、今も主の正義と公平が実現されているとは言えない現実があります。いや、むしろ、理想からどんどん後退しているようにさえ思えます。そのような現実に生きているからこそ、私たちは一日も早く、平和が実現してほしいと願っています。

今こそ、私たちも正義の若枝として立ち上がる時なのだと思います。ただ待つだけではなく、ただ願うだけでもありません。私に託されている役割を神に聞き続け、神の呼びかけに応えていくこと。主の再臨を待ちながら、今できる精一杯をやり続けていくこと。

アドヴェントはその決意を新たにするときなのです。